〈資料〉

2023 年度教職相談活動報告

藤田則恵

はじめに

学校現場においては，近年の教員の大量退職・大量採用等を背景に教員を巡る環境が大きく変化している。さらに，少子化により学齢期の児童生徒が減少する中，特別支援教育をうける児童生徒数が 10 年間で約２倍となっていることなど，課題が複雑化，多様化している。このような状況の中,「令和の日本型学校教育」を担う教師に求められる資質能力の柱の一つに「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」が挙げられている。特別支援教育に長く携わってきた経験を活かし，相談活動の充実に向けて努めたいと考えた。

１　相談の概要

来談者の実人数は 35 名（令和５年 12 月末現在）であり，昨年度の同時期（令和４年 12 月末 31 名）に比べると若干増加している。担当者の交代もあったが，新型コロナウイルス感染症の位置づけが，令和５年５月８日から「５類感染症」になり，対面での相談が実施しやすくなったことが要因と考える。学部別内訳は，地域学部 27 名，工学部２名，農学部４名，大学院・その他２名であった。４年生や大学院生のうち大学推薦を目指す３名については，自己ＰＲ等の添削を行った。相談室には４月から８月上旬までは４年生が，個人面接や集団討議，グループワーク，模擬授業等の練習に訪れた。9 月以降になると，３年生が次年度の採用試験に向けて，相談に訪れはじめたが，中には教員になるかどうか迷っている学生もいた。1,2 年生の来室はほとんどない状況であり，１次試験（筆記）に向けた取り掛かりの時期については課題が残る。

２　教員採用試験に向けての取組

（１）教職相談室において

今年度，鳥取県では全国に先駆けて教員採用試験（1 次試験）が６月 11 日に実施された。２次試験の日程も早まり，８月の初旬から中旬にかけて行われた。他県も実施時期を早める傾向にあり，４年生は５月以降，面接練習にも熱が入っている様子がうかがえた。一方，試験内容については，前年度と大きく変更する自治体は見受けられなかった。また，集団討議やグループワークは，学生たちが自主的に声を掛け合い，日時等を調整して，校種を問わず４人～７人程度で練習を行った。これにより，他者の考えや意見等を聞くことができ，試験内容に係る情報交換を行う等，試験に向けた意欲が高まることにつながった。

（２）外部指導者による教員採用試験面接指導等

教職経験の豊富な退職校長による指導を受けることを通して，学校現場や教育行政における状況を知ったり，求められる教員像や教員の資質能力等について考えたり，これまでの自身の経験等を振り返りながら，自分の考えと向き合ったりする良い機会となった。

今年度は，４年生を対象とした面接指導を６月に１回（約３時間），３年生を対象とした面接

指導等を３回（１回１時間半）実施した。

３年生に対しては，採用試験に向けての意識づけや面接に向けた心構え等を指導するために回数を重ねたが，参加者が少人数（１回７名，２回３名，３回６名）だったのが少し残念であった。本指導のねらい等について，学生への伝え方を工夫することが課題として残る。そのような中，３回とも参加した学生たちは，回数を追う毎に自分の考えを積極的かつ表情豊かに発言できるようになったことは，大きな成果である。

３　「学び・遊び・つなぐ」プロジェクトのコーディネート

今年度は「学びの教室」（特別編を含む）６コマ，「学びの座談会」１コマ，「つなぐ教室」４コマのコーディネートを行った。計 11 コマの参加人数は 659 名であった。「学びの教室」６コマは，幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校からそれぞれ教員を招聘し，各校種の専門性を発揮した講義をしていただいた。参加学生の感想は「教員のやりがいを感じた」「授業は楽しさが大切だと痛感した」など好評だった。なお、特別編として，県内の農業学科系の高等学校（４校）の管理職に「自校の特色」についてご紹介していただく機会を設けた。農業系の教職への関心を高め，志望者増加につながることを期待したところ，学生から「（農業系の教員に）興味をもった。」という感想も寄せられた。また，「学びの座談会」では，本学卒業生の小・中学校教員２名を講師に招き，座談会形式で開催した。講師の講話をもとに，質疑応答や意見交換等に丁寧に応対していただいた。さらに，「つなぐ教室」では，在外日本人学校（香港）から帰国された教員にコロナ禍での現地での苦労や工夫等をご紹介いただいた。在外日本人学校という道があることを初めて知った学生も多く，興味深く講義に聞き入っていた。他に同教室には，元サッカー日本女子代表「なでしこジャパン」で活躍した経験のある米子翔英学園はぐくむセンター長や，県内初の夜間中学校である県立まなびの森学園校長を講師として招聘し，多様化，グローバル化する社会へと視野を広げた。

４　成果と課題

教職相談室の主な活動はこれまで述べた３点である。その中で，相談室に来室する学生は自分の思いを話すことから始まるが，面接練習の回を重ねるごとに話し方に変化をみることができる。はじめは，型にはまったような答え方であったものが，自身の経験等をもとにオリジナリティを感じさせる答え方に変わってくる。自分と向き合い，なぜ教員を目指そうとしているのか，どのような教員になりたいのか等，教員採用試験を通して「自分」を知り，ぶれない軸を獲得していく。相談室に来室する回数と比例するわけではないが，やはり回数を重ねることは成果につながる一歩だとも思われる。継続は力なり。

おわりに

来室した学生には一人一人のニーズになるべく対応しようと心がけた。今年度から取り組んだイベントもあるが，周知方法には課題があった。教員をめざす学生，めざすかどうか悩んでいる学生に相談室の活動等の周知方法や活動の工夫など，今後も学生や関係の教職員から意見や要望等を聞き，より充実した相談室活動にしたい。

藤田則恵（鳥取大学教育支援・国際交流推進機構　教員養成センター）